

ビジネス及びマネジメント研究における文献レビュー：

システマティック・レビューとデータベース利用に着目して

木 田 世 界

1. はじめに

本稿は、ビジネスやマネジメントに関連する研究において文献レビューを行う際に、良い文献レビューとはどのようなものであり、それはどのような手段・ツールにより実現できるかを考察するものである。ビジネス及びマネジメント研究という言葉を用いる意図は、経済学、法学、社会学、歴史学、商学、経営学といった学問分野にとらわれず、企業や組織及びそれに属する人々の経済活動を研究する上で問題を扱いたいと考えるためである。企業をはじめとする組織体が社会のハード・ソフト両面でのインフラを支えている企業社会・組織社会としての現代において、ビジネスやマネジメントは商学・経営学のみならず上述の様々な諸学問の対象になり得るし、商学・経営学自体がそれらの先行する学問の成果を借りて成立・発展してきたとも言えるであろう。本稿の読者としては、それらの諸学問に携わる研究者、研究補助者、博士課程・修士課程の院生や、アカデミックな論文執筆を志す学部生などを想定している。

本稿では特に、システマティック・レビュー [Systematic (Literature) Review, 系統的文献レビューまたは体系的文献レビュー等と訳される, 以下SR] に注目する。そして、現代において文献レビューを実施する上で欠かせないツールとしての文献データベースの利用にも注目して検討を行う。SRは大きな新規の研究プロジェクトの初めや学位論文執筆の際に実施することが推奨されており (Kraus et al., 2020), そのような機会を持つ者にとって、SRやそれを可能にするデータベースに関して理解を深めることは欠かせない。

構成としては、まずは2節において良い文献レビューとはどのようなものとされているかを示す。そして、3節において近年普及してきたSRが提起された背景、およびその手順について簡潔に言及する。その後、4節においてSRにおける文献データベースの利用の現状や代表的なデータベースの利用に関わる長所と問題について説明する。その後、5節において、国内における経済学、会計学、アントレプレナーシップ研究なども含む経営経済系研究におけるSRの例についても簡潔に言及する。なお、本稿自体は研究環境と時間の制約によりシステマティック・レビューの方法論に基づき執筆するものではない。

2. 良い文献レビューとはなにか

文献レビューとは「既存研究の体系（あるいは詣体系）の検討を通じて、理論の構成要素を特定し、それに挑戦し発展させることでその体系を分析し統合する、1つの研究」(Post et al., 2020, p.352, 服部, 2022, p.201による訳)を表している。

文献レビューの機能としては、①要約、②統合、③批判、④方向性の提示があり、場合によっては新研究領域の創造という機能を持つこともある。良い文献レビューを考えるに当たり、a.当該領域に関して蓄積されてきた研究を広くカバーしている度合い、b.そのレビューがオリジナルの価値を提供している度合いの2軸が問題となる。要約機能により適切な程度に広くカバーをし、統合・批判・方向性の提示を通したオリジナルの価値提供、意味付けがあるものが良いレビューだと考えられており、a・bともに小さい場合は情報過小レビュー、aのみ小さい場合は独善的レビュー、bのみ小さい場合は研究ノートのレビュー、aのカバー範囲があまりにも広すぎる場合は情報過多なレビューとなってしまう(服部, 2020; 田中・市川, 2011)。

レビューでカバーする既存研究の範囲に関連しては、以下の4つが挙げられ、どのような方法が選択されるかは、当該分野における先行研究の蓄積状況や既存の文献レビューの存在によって異なるとされている (Cooper (1988); 服部,

2022)。

- (1) 領域全体をカバーする網羅的なもの
- (2) 分野全体を狩猟しつつも、その中から選択したいいくつかを紹介していくもの
- (3) 各トピックに関わる研究から典型的なものや代表的なものをピックアップするもの
- (4) 当該分野において相対的に重要・中心的なものに限定するもの

このように、文献を選択する範囲に関しては多様な選択肢が存在する。重要な文献に絞ってレビューする方法も、個々の文献を深く吟味したり、その領域における議論の本質を掴む上で有用と考えられるが、近年ではマネジメント分野においても網羅的、体系的に文献を収集、分析するシステムティック・レビューが標準になりつつある (Hiebl, 2023) ことから、次節ではシステムティック・レビューについて簡単に紹介する。

3. システムティック・レビューの意義と手順

3. 1. システムティック・レビューの由来, 意義

以下では、主に眞喜志 (2017) に基づきシステムティック・レビュー (SR) について概説する。SRは、医学研究において、Evidence Based Medicine (EBM) という概念との関連で普及してきた方法論と言える。Sackett (1996) はEBMを「最善の根拠を、臨床経験、患者の価値観と統合すること」(眞喜志, 2017:p.472による訳)と定義しており、過去に蓄積された医学研究の結果を吟味し科学的な観点から患者にとって最善な医療を求めるものだと言える。最善な解決策・治療を定めるに当たっては、リスクや効果に関する確率論に基づく予想が求められ、そのためには異なる集団 (例: 介入群/非介入群) において、それぞれの対象 (患者) の数 (分母) と、ある事象 (例: 疾病の罹患, 治癒) が生じた対象の数 (分子) を知る必要がある。このような確率に関する情報を提供するのがエビデンスであり、エビデンスには、弱いものから順に、症例報告, コホー

ト研究, ランダム化比較試験, 二重盲検化ランダム化比較試験, SRとメタ・アナリシスがあり, SRは最も強いエビデンスとして位置づけられている。

医学研究におけるSRはCochran Library のホームページによると、「システムティック・レビューは、ある特定のリサーチ・クエスチョンに答えるために、事前に定められた適格性の基準に沿ったエビデンスの発見、評価、統合の試みである。システムティック・レビューを行う調査者は、意志決定のための情報を生み出すために、バイアスを最小化し信頼性の高い発見をすることを目指し、明示された体系的な方法に従う」（筆者訳、2023年11月24日アクセス）と定義されている。眞喜志（2017）はSRの趣旨について、たとえば調査者が関心のあるテーマについて、100件の調査があり、そのうち4件が調査者の考えに沿う論文であった場合に、その4件だけを引用して主張を正当化しようとするようなことを避けることがあるとしている。つまり、調査者のバイアスを排しながら研究全体において、どのような結果のバリエーションが有り全体的に見てどの主張が優勢なのか、エビデンスの数や強さを考慮しながら考察することがSRの意義だとしている。SRの手順としては眞喜志（2017）はCochrane Library HPにおける当時の説明を元に、1. 研究テーマの収集, 2. 先行研究の漏れのない収集, 3. 各研究の妥当性の評価, 4. アブストラクト・フォームへの要約, 5. メタ・アナリシスによる統計学的解析, 6. 結果の解釈, 7. 編集と定期的更新があるとしている。

3. 2. システムティック・レビューの手順

ここではアントレプレナーシップ研究におけるSRの方法を論じているKraus et al. (2020) を主に参考としながらSRの手順の概要を説明する。Kraus et al. (2020, p.1033) では、SRのステップとして、以下の4ステップを挙げている。

(1) レビューの計画

- ① 必要性の検討
- ② プロトコルの作成

- (2) 先行研究の発見と評価
- (3) データの抽出と統合
 - ① データの抽出
 - ② データの統合
- (4) レビューからの発見事項の発表・普及

(1) レビューの計画

Kraus et al. (2020) は最初に行うべきこととして、SRを行う必要があるかを検討することを挙げている。SRは、実証研究論文の冒頭のレビューとは異なりそれ自体独立した論文として発表されることが一般的であり、大きな研究プロジェクトの開始のタイミングで執筆されることもある。博論執筆前にSRを行うことも推奨されている。必要性に関しては、先行研究の蓄積度合いや他の既存もしくは（PROSPEROなどにプロトコルが登録されている）進行中のレビューの存在などの点が関係していると考えられる。

レビューの実施を決めたら、計画を示しレビュー作業の指針となるプロトコルを作成する。プロトコルには、検索で用いるキーワードの組み合わせ、用いるデータベース、文献の包含・排除を決める基準、質的基準などを含める（Pittaway et al., 2014）。Kraus et al. (2020) はこのプロトコルは変更不可能なものではなく、レビューを進めながら修正しても構わないが、修正内容がプロトコルに記載・反映される必要があるとしている。

(2) 先行研究の発見と評価

この段階では、どの範囲の文献を検索し、ヒットした中でどの文献をレビューに含めるか、含めないかが問題となる。Kraus et al. (2020) はアントレプレナーシップ研究においては、灰色文献を含めず、学術誌に絞って論文を収集することを勧めている。学術誌の中でも、VHB RatingでC以上のものを対象とすることを推奨している。ただし、これらの基準は、アントレプレナーシップ研究における一例であり、ビジネス及びマネジメント研究の中でもいかなる領域や

趣旨で行うかにより、含めるべき文献の種類、水準は異なると考えられる。

Kraus et al. (2020) は続けて、文献のタイトルを確認し、事前に作成した内容に関する質的基準、リサーチクエスチョンに基づき、レビューに含める文献を絞り込むことを勧めている。そして、絞り込みが不十分で統合するにあたって数が多すぎる場合、二次的な絞り込みとしてアブストラクトを読んで更に絞り込むことを推奨している。(なお、絞り込みの各段階での文献の数を記録しレビュー論文にに記載することが一般的である。)

(3) データの抽出と統合

データの抽出というと、数値などの量的なものが想起されるかもしれないが、Kraus et al. (2020) はデータを必ずしも量的なものに限定しているわけではなく、論文の記載内容のような意味で用いている。ここでは、SRの著者のバイアスの影響(たとえば、考えに合わない記載内容を無視する)を避けるため、表などの情報記載用のシート(フォーマット)を活用し、予めどのような項目について抽出するか決めておき、それに沿って入力していくことを推奨している。表の例として、Newbert (2007) 等がある。また、バイアスを避けるため2人以上の者で作業を行うことを推奨している。

データの統合に関して、Kraus et al. (2020) はレビューは単なる要約ではなく、先行研究を比較し分析しなければならないと述べている。そして、著者に注目して整理する方法は単なる要約になりやすいため、概念に注目して分析すべきとしている。Kraus et al. (2020) は具体的な方法はレビューの趣旨により異なるためNewbert (2007) などの例を挙げるに留めており、あまり詳しくは論じていない。この点に関しては、服部 (2020) によるレビュー論文の機能における統合や批判の説明が参考になるであろう。ここでは、統合の方法として研究のアジェンダの提示、分類の提示、代替的モデルや概念的フレームワークの提示、理論に関する理論であるメタ理論の提示の4点が挙げられている。また、批判の方法として、以下の9点が挙げられている(服部, 2020, p.213)。

(1) 議論の矛盾や不一致

- (2) 集合的な無知
- (3) 概念や理論の起源や発展の歴史
- (4) 研究の基本仮定
- (5) 採用されている方法の問題
- (6) 主たる調査対象の問題
- (7) 経験的な世界とのズレ
- (8) 概念の曖昧性や再定義の必要性
- (9) 理論や概念が当てはまる境界条件の再検討

(4) レビューからの発見事項の発表・普及

Kraus et al. (2020) はSRはエビデンスのピラミッドの最上層に位置し、多数の実証研究を統合したものであり、個々の実証研究よりも一般性を持つとしている。そのため、特定の分野の研究者だけでなく、マネージャーや起業家など一般の人々にも理解可能な形で執筆・公表することを勧めている。

以上がKraus et al. (2020) に基づくSRの手順である。私見に基づき、医学研究とビジネス及びマネジメント研究におけるSRの違いについて若干の補足を行うと、医学研究ではSRはメタ・アナリシスとセットで行われることも多いが、ビジネス及びマネジメント研究ではSRにおいてメタ・アナリシスまでは行わないことも多い。その背景として、ケーススタディなどの質的研究が重要な役割を担っていることが多いことも関係していよう。また、たとえば医薬品の効果などはある程度普遍的な法則化を行いやすいと考えられるが、ビジネス及びマネジメント研究では、時代性や文化、産業などの文脈の影響も大きく、広範に成立する普遍的な理論の探求よりも中範囲の理論が求められる傾向にあると思われる。この点は、SRを行う際にどれくらい広く文献を収集し統合するか決定する際に考慮に入れた方がよいであろう。

4. ビジネス及びマネジメント研究におけるシステムティック・レビューとデータベース利用

4. 1. ビジネス及びマネジメント研究におけるシステムティック・レビューの現状

Hiebl (2023) は *Academy of Management Annals* と *International Journal of Management Reviews* に掲載された SR 論文 232 本を分析し、マネジメント研究における SR でのサンプルセレクションに関して論じている。ここでは、SR に求められる性質として、体系性、包括性、透明性の 3 点が挙げられている。体系性は、レビューの各手順が説明され、恣意的ではないことであり、リサーチ・クエスチョンや、キーワードや検索に用いた語が明確であることを示す。包括性は、レビューが事前に提示したリサーチ・クエスチョンに関連しレビューへの包含基準に合致するすべての文献をカバーしている度合いを表す。透明性は、レビューがどのような手順で文献を収集、選別し最終的なレビュー・サンプル（文献）に到達したか、最終的なレビューサンプルには何が含まれるかを明示することであり、他の研究者が文献の収集—選別プロセスを追試できる度合いを示している。

Hiebl (2023) は SR の方法として、1. ジャーナルドリブン、2. データベースドリブン 3. 影響力の大きい文献とその引用に注目するアプローチ、4. 組み合わせアプローチを挙げている。1 は一つ又は複数の特定のジャーナルに掲載された論文に絞って SR を実施しているもの、2 は一つ又は複数の特定のデータベースで検索された論文を対象に SR を実施しているもの、3 は一つ又は複数の影響力の大きい文献に着目し、それらを直接/間接に引用している文献を対象に SR を実施しているもの、4 は上記の方法等の組み合わせである。Hiebl (2023) はレビューした SR の中の過半数で 2 のデータベースドリブン・アプローチが使われており、次いで 1 のジャーナルドリブン、次いで 4 の組み合わせアプローチが用いられており、3 の影響力の大きい文献アプローチはわずかしか用いられていないと述べている。

このように、SR においては、データベースドリブン・アプローチが最も用いられている。Hiebl (2023) はデータベースドリブン・アプローチのメリッ

トとして、ジャーナルドリブンなど他の方法に比べ多種・多数の文献をカバーできること（包括性が高い）を挙げており、デメリットとしては、導入のコストや文献選別の手間を挙げている。データベースドリブンSRにおいて、もっとも用いられているデータベースはEBSCO（57%）であり、以下、よく用いられている順にWeb of Science（47%）、ABI Inform/ProQuest（44%）、GoogleとGoogle Scholar（21%）、PsycINFO/PsycLIT（16%）、JSTOR（12%）、Scopus（11%）であり、基本的にmultipublisher databases [(データベースの提供会社自身以外も含む) 様々な出版社のジャーナルを収録しているデータベース] が用いられていた。publisher-specific databases [特定の出版社(自社)のジャーナルのみ掲載しているデータベース] が用いられることはあまりなく、ScienceDirect (Elsevier), Emerald, Wiley, SAGE, Taylor & Francisなどのpublisher-specific databasesのいずれかを用いているSRは全体の25%であった。個々のSRにおいて用いられているデータベースの数の平均値は3.03、中央値は3.00であり、一つのSRにおいて3つ程度のデータベースを用いることが標準的とされている。

Hiebl (2023) はどのようなデータベースでも3つ程度用いれば十分というわけではなく、publisher-specific databasesを複数用いたとしても、multipublisher databasesを用いている場合よりも限られた範囲の文献を扱うこととなり、包括性が十分とは言えないことを指摘している。publisher-specific databasesを用いるメリットとしては、multipublisher databaseに掲載される前のin-pressや最新の論文が含まれていることが指摘され、publisher-specific databasesはSRにおいてあくまで補足的な位置づけであることが示されている。また、GoogleとGoogle Scholarも補足的な位置づけであることが指摘され、multipublisher databaseに加えGoogleとGoogle Scholarを用いることで、multipublisher databaseにあまり掲載されていない灰色文献（ワーキングペーパー、白書、報告書等）をカバーするために用いられると指摘されている。このように、Hiebl (2023) はGoogleとGoogle Scholarやpublisher-specific databasesを必要に応じて補足的に使い、できるだけ多くのmultipublisher

databaseを用いてSRを行うことを推奨している。

また、Hiebl (2023) はマネジメント研究における効果的、効率的なSRの方法として、EBSCOにおけるBusiness Source Premierの利用やWeb of Scienceにおける“management”, “business”, “business finance”などのカテゴリー指定による検索の利用を挙げている。(必要に応じて補足的なデータベース利用や、ヒットした文献の参考文献リストに含まれる文献の追加などでより広範囲の文献を収集することも行いながら) ビジネスやマネジメント分野の文献に限定して検索することで、検索時のヒット数が過剰に大きくならないようにし、レビュー執筆者のリサーチ・クエスチョンと関わりの深い文献を十分にカバーしつつ、現実的な範囲の労力でSRを実行できるというメリットが提示されている。

4. 2. 各データベースの性質

前節では、SRを実行するにあたり、データベースドリブン・アプローチが最も用いられていることを確認し、その中でもEBSCOなどの学術出版社が提供するmultipublisher databasesがよく用いられており、Google Scholar等は補足的に用いられていることを示した。ここで、これらのデータベースにはどのような特徴があるか確認したい。

Google Scholarは2004年にリリースされた(広義の)学術文献の検索サービスであり、今日においては多くの研究に使われている。Googleで用いられているクロウリング(プログラムがWEB上を探索し情報を集めること)技術を応用し、学術機関のリポジトリに掲載されている文献などを中心に様々な文献にアクセスすることができる。Google Scholarでは基本的に、関連度と被引用数をもとに検索結果の並び順が決まるとされている(片岡, 2006)。Google Scholarのメリットは、無料で気軽に多様な文献にアクセスができ、シンプルなユーザーインターフェイスにより使いやすいという点が挙げられる。

デメリットとしては、まず、オープンアクセスの文献にしか本文にアクセスできないことが挙げられる。(ただし、大学図書館等や利用者で適切に設定

がなされた場合、大学ネットワーク内において、Google Scholarの検索結果から直接、大学が購読している文献にアクセスすることができる。仮にGoogle ScholarのみでSRを実行するとすれば、大学の購読状況によってはほぼすべての論文を個別購入せねばならないこととなる。その場合、数百件の文献を扱うこともあるSRでは、多額の費用が発生することとなる（仮にPay per view単価5000円の論文を100本購入するとすれば、50万円の費用が発生することとなる）。また、ILL (Inter Library Lending) により文献の貸出や複写の提供を受けるにしても、送料・複写料のコスト、膨大な文献を扱う事務処理の手間や時間などに加えて、基本的に紙媒体での提供に限られるという問題点があり、文字検索の利用や文献の持ち出し・収納といった面で電子化の恩恵が受けられない点は、多数の文献を扱うSRでは無視できない障害となると考えられる。

第二に、機械的に文献が収集されているため、収録されている文献の質が保証されないことである。これは、多様な文献にアクセスできるメリットの裏返しとも言える。学術機関のリポジトリ等に掲載されている文献が中心であるため、Googleの検索結果よりも学術的な文献が表示される仕様ではあるが、ハゲタカジャーナルや信頼性の低い文献が収録されている可能性を否定できず、実際に著者の過去の全論文を引用している偽論文を大学のサイト上にアップし、Google Scholarに掲載されることに成功した（著者によりh-indexなどGoogleが提供する引用指標を操作できる可能性が示された）という実験結果を報告する文献もある（Delgado et al. 2014）。文献の追加が機械的に行われるため、全体の収録数に関する公式情報がなく、また、検索する時期によりヒットする内容が大きく変化する可能性がある点も、良いSRの要件である透明性という観点からは問題となり得る。

第三に、検索・並び替え機能が限定的であることが挙げられる。検索に関しては、ANDやORなどの演算子を用いることはできる。しかし、アブストラクトや論文著者が提供したキーワードを用いた検索を行うことは出来ず、全文検索とタイトル検索しか実行できない。全文検索では、リサーチ・クエスチョンに関係のない多数の論文が表示されてしまう、非常に多くの文献が表示され

てしまうという問題があり、関連する論文を網羅的に扱うSRを行うのはほとんど不可能であり、もし実行したとしても、SRの読み手にとって情報過大なレビューとなってしまふであろう。一方でタイトル検索では、ヒットする論文が少なすぎるという問題が生じる。また、Google Scholarでは並び順を指定できず、関連度や引用数、検索履歴を元にアルゴリズムが導き出した順番で表示される。28種のデータベースのSRにおける有用性を検証したGusenbauer & Haddaway (2020)による検索結果の再現性テストでは、Google Scholar検索結果には、データベースの収録数の増加による成長の影響を排除しても、検索結果の再現性がないことが示されており、透明性を重視するSRにおいて深刻な問題がありSRに用いるべきではないと指摘されている。

以上、Google Scholarに関して様々な問題点を指摘したが、無料で利用できるツール、選択肢の存在自体は歓迎すべきことであり、SRを行うに当たっても灰色文献を含めた多様な文献を収集する補足的ツールとしてGoogle Scholarは有用だと言える。

次に、multipublisher dabasesの中でもビジネス及びマネジメント研究でもっとも使われることが多いと思われるEBSCOのデータベースについて説明したい。EBSCO Business Source はEBSCO Information Service により提供されている経営、経済学系の文献データベースである。収録文献の多いものから順に、Ultimate, Complete, Premier, Eliteの4バージョンが有る。同社のHPによれば、2023年12月2日時点でEBSCO Business Source Ultimateは3461誌、Complete は1,727誌、Premierは969誌、Eliteは495誌の学術誌・雑誌の全文情報（本文含む）を継続的に収録しており、バージョンが下がるごとに約半数の収録誌数となる。また、どのバージョンにも同社により選定された1722誌のオープンアクセスジャーナルも収録されている。EBSCO Business Sourceに含まれている学術誌・雑誌全体のリストについては同社のHPで公開されている。商学・会計・経営学分野に加え、経済学、法律、経営情報システム等の分野の文献も収録されている。また、Premier以上のバージョンに関しては、学術誌・雑誌以外のビジネス関連コンテンツも収録されていることが示されて

おり、ケーススタディ-ビジネス分野、会社概要/情報、会議論文/プロシーディング集、国別経済レポート、産業レポート、市場調査レポート、SWOT分析、動画-AP通信社、ワーキングペーパー-ビジネス分野が収録されている（これらのものを検索から除外することもできる）。収録内容の豊富さについて、Google Scholarとの比較から評価すれば、EBSCO Business Sourceでは多数の学術誌の本文が提供されていることで、SRの実行可能性を高めていると言える。ただし、最下位のバージョンであるEliteに関しては、Ultimateの約1/7程度の収録誌数という限定された状況になっている。一方、Google Scholarでは日本語の文献も検索可能であるが、EBSCO Business Sourceでは基本的に日本語文献は収録されていない。

収録内容の質に関連して同社のHPでは、「EBSCOではオープンアクセスジャーナルをデータベースに収録する前に、Web of ScienceやScopusなどの主要なcitation indexや、APA PsycInfo・SciFinderなどのsubject indexを参照し、関連性や品質を判断しています。更に漏れがないように、サブジェクト関連の専門スタッフがハゲタカジャーナルを刊行する捕食出版社のリストと、業界の情報を定期的に確認しています。」とされており、収録誌に関して一定の品質管理が行われている。収録の決定の後に学術誌がハゲタカジャーナル化する可能性なども考慮すれば、EBSCO Business Sourceに絶対にハゲタカジャーナルが含まれないとは断定できないが、Google Scholarのように機械的に文献を収録しているデータベースよりかは問題のある文献を収録している可能性が低いと考えられるであろう。

検索機能に関しては、題名、アブストラクト、著者によって付されたキーワード、出版物のタイプ、論文記事中で言及されている企業/団体名、論文記事内で言及されている商品・製品名、論文記事が出版された国等26種類の検索フィールドによる詳細検索が可能であり、SRを行う研究者の意図に沿って、漏れやノイズの少ない検索や、ヒットする件数の調節を容易にしている。くわえて、シソーラス（関連語群）による検索機能もあり、入力された単語に関連する語句を一覧形式で表示し、選択したもののすべてを同時に検索することで漏

れなく検索を行うことを支援する機能も備えている。これらの機能は、包括性を重視するSRにとって有用だと考えられる。

他にビジネス及びマネジメント研究で使われることの多いデータベースとして、Web of Science, ABI Inform, PsycINFO/PsycLIT, JSTOR, Scopusなどのmultipublisher databasesがある。これらに関しても、検索結果の再現性はEBSCOと同様に問題がなく (Gusenbauer & Haddaway, 2020), 詳細検索の機能などはある程度EBSCOに類似していると思われる。詳細の説明は各社・各団体のウェブページに譲るとして、主な収録分野には違いがあり、ごく簡潔に説明するとWeb of Science, Scopusは自然科学, 社会科学, 人文科学などの幅広い分野を収録しており, JSTORも同様に幅広い分野の文献を収録しているが, 古い年代のアーカイブに力を入れている。PsycINFO/PsycLITは心理学分野を主に収録しており産業組織心理学や組織行動論の研究に有用と思われる, ABI/InformはProQuest社が提供するデータベースで, ビジネス関連の雑誌, 新聞, レポート等の収録に特に力を入れており, ビジネス関連の学術誌や学位論文もある程度収録している。

5. 国内におけるSRの例

ここでは、国内におけるSRの動向を示すため、広義のビジネス及びマネジメント研究の分野（経営経済分野）での国内におけるSRの例を紹介する。

経済学分野においては、中村・鈴木（2019）は開発ミクロ実証経済学の分野でSRを行っている。この論文は、開発経済学分野の4大ジャーナル（海外ジャーナル）の実験系論文を対象としたSRを行っている。ここでは、実験手法やトピックなどの情報が抽出され、開発ミクロ実証経済学は実験系論文に寄せられる課題を解消しているかという問いへの答えが探られている。また、文献収集の期間として、著者らが関心を持つ「信頼性革命」の議論が始まった2010年から当該論文の出版直前までの期間を対象としている。

会計学分野においては、牧野（2020）は、国内における中小企業の管理会計

研究についてSRを実施している。ここでは、国内の研究を網羅的に検索するため、CiNiiが用いられている。また、方法論においては、検索の手順が以下のように明確に示されている。

……「中小企業」と「管理会計」に関連するキーワードを網羅的に用いる。キーワードの一つ目の「中小企業」を意味する用語は、「小規模事業」、「小規模企業」、「中小企業」、「中規模企業」、「スタートアップ」の用語をOR検索の論理演算を用いて結合した。キーワードの二つ目の「管理会計」を意味する用語は、「管理会計」、「マネジメント・コントロール」、「予算」、「業績測定」、「業績管理」、「業績評価」、「原価計算」、「原価管理」、「活動基準原価管理」、「活動基準原価計算」の用語をOR検索の論理演算を用いて結合した。そして、「中小企業」に関連する用語と「管理会計」に関連する用語を、AND検索の論理演算を用いて、検索を実施した。この手順によって、2018年5月31日までに、CiNiiオンライン検索で入手可能なすべての論文を入手した。(牧野, 2020 p.77)

このような検索手順の詳細な説明は、SRにおける再現性を高めるために重要だと考えられる。敢えて付言すれば、CiNiiの場合フリーワード検索とタイトル検索が可能のため、どちらを用いたか記載することが望ましいと考えられよう。

アントレプレナーシップ研究では、関(2021)は起業家活動プロセスに関連する海外の研究について、Web of Scienceを用いてSRを行っている。ここでは、Web of Scienceでヒットした文献(学術論文、書籍の章)の他に被引用件数を基準として若干の重要な文献を手動で追加している。そして、HistCiteを用いて、年代ごとの研究本数の推移や文献が掲載されているジャーナルの分析が行われ、文献間の引用関係(引用マッピング)に基づいて、9つのテーマ・クラスター(研究トピック)を提示している。

商・経営学分野では、最近の研究として、唐沢(2023)がサービス・エコシステムについて、金(2020)がサステナビリティ・マネジメント・コントロー

ル・システムについて、大西（2017）がフィランソロピー概念についてシステムティック・レビューを行っており、いずれにおいてもEBSCO Business Source Premierが用いられている。ただし、EBSCOに加え金（2020）ではScience Direct（ELSEVIER）、大西（2017）ではABI/INFORMとJSTORが併用されている。また、唐沢（2023）は分析にあたってKH Coderを用いている。

やや脱線となるが、関澤（2016）はシステムティック・レビューのあり方からレギュラトリーサイエンスの意味を考えると題した論文であり、システムティック・レビューの意義を考えるうえで参考になる。

以上から、少数の例の紹介ではあるが、国内で発表されている経営経済系のSRについて、国内文献を対象とする場合はCiNiiが有力なデータベースと考えられる。海外文献を分析する場合は、海外の研究者が行うSRと同様、EBSCOやWeb of Scienceがメインのデータベースとして用いられ、特にEBSCO Business Source Premierが用いられることが多い傾向にあると思われる。

6. おわりに

本稿ではまず、良い文献レビューの要件として、当該領域に関して蓄積されてきた研究を広くカバーし、オリジナルの価値・視点を提供していることを示した。そして、医学研究において、調査者のバイアスを排しながら研究全体の中でどのような結果のバリエーションが有り全体的に見てどの主張が優勢なのかを判断する方法として、SRが提起されたことを示した。その後、ビジネス及びマネジメント研究におけるSRの手順、SRにおけるデータベース利用の現状と代表的データベースの特性について論じた。そこでは、SRにおいてはmultipublisher databasesを用いることが一般的であること、Google Scholarは検索機能の貧弱さ、限定された本文アクセスに加えて、収録されている文献の品質や検索結果の再現性の問題からSRにおけるメインのデータベースとして用いることが実質的に不可能であり、EBSCO Business Sourceなどのmultipublisher databasesを用いるべきこと（そして、実際にSRでもっ

ともよく利用されていること)を示した。また, ScienceDirect (Elsevier), Emerald, Wileyなど自社ジャーナルのみを収録するpublisher-specific databasesはSRのメインのデータベースとして用いるのは適していないことを示した。その後, 国内のSRの動向について経済学, 会計学, 商学, 経営学, アントレプレナー研究などの例を挙げながら説明し, EBSCO Business Source Premierがよく用いられており, 海外での動向に近いと思われることを示した。

本稿の課題としてはまず, SRに関する指針やチェックリストを提示しているPRISMA声明について解説できなかったことがあり, この点は上岡(2021)などを参照されたい。また, 文献レビューにおいて透明性や再現性がなぜ重要になるのかに関しても, 科学哲学の視点やSRの方法論の研究などを参考に検討を加えるべきと考える。あわせて, SRと統合的文献レビュー(integrative literature review, e.g. Torraco, 2016; 服部, 2020)との共通性, 差異など類似概念との比較も残された課題である。加えて, 国内のビジネス及びマネジメント研究におけるSRの現状についてもさらなる分析を行いたい。

参考文献

- Cochran Library Website (<https://www.cochranlibrary.com/about/about-cochrane-reviews>) (2023年11月24日アクセス)
- Cooper, H. M. (1988). Organizing knowledge syntheses: A taxonomy of literature reviews. *Knowledge in Society*, 1 (1), 104-126.
- Delgado, L., E., Robinson, G. N., & Torres, S. D. (2014). The Google scholar experiment: How to index false papers and manipulate bibliometric indicators. *Journal of the Association for Information Science and Technology*, 65 (3), 446-454.
- EBSCO Website (<https://www.ebsco.com/products/research-databases/business-source-premier>) (http://www.ebsco.co.jp/materials/manual/BSP_searchguide.pdf) (2023年12月5日アクセス)

- Gusenbauer, M., & Haddaway, N. R. (2020). Which academic search systems are suitable for systematic reviews or meta-analyses? Evaluating retrieval qualities of Google Scholar, PubMed, and 26 other resources. *Research Synthesis Methods*, 11 (2), 181-217.
- Hiebl, M. R. W. (2023). Sample Selection in Systematic Literature Reviews of Management Research. *Organizational Research Methods*, 26 (2), 229-261.
- Kraus, S., Breier, M., & Dasí-Rodríguez, S. (2020). The art of crafting a systematic literature review in entrepreneurship research. *International Entrepreneurship and Management Journal*, 16 (3), 1023-1042.
- Newbert, S. L. (2007). Empirical research on the resource-based view of the firm: An assessment and suggestions for future research. *Strategic Management Journal*, 28 (2), 121-146.
- Pittaway, L., Holt, R., & Broad, J. (2014). Synthesising knowledge in entrepreneurship research—the role of systematic literature review. *Handbook of Research on Small Business and Entrepreneurship*, 6, 83-105.
- Post, C., Sarala, R., Gatrell, C., & Prescott, J. E. (2020). Advancing theory with review articles. *Journal of Management Studies*, 57 (2), 351-376.
- Sackett, D. L., Rosenberg, W. M., Gray, J. M., Haynes, R. B., & Richardson, W. S. (1996). Evidence based medicine: What it is and what it isn't. *British Medical Journal*, 312 (7023), 71-72.
- Torraco, R. J. (2016). Writing Integrative Literature Reviews: Using the Past and Present to Explore the Future. *Human Resource Development Review*, 15 (4), 404-428.
- 大西たまき. (2017). フィランソロピー概念の考察—西欧におけるフィランソロピー研究のシステムティック・レビューと日本のフィランソロピー研究の発展に向けて—. 『ノンプロフィット・レビュー』, 17 (1), 1-10.
- 上岡洋晴. (2021). 「PRISMA 2020 声明：システムティック・レビュー報告

- のための更新版ガイドライン」の解説と日本語訳. 『薬理と治療』, 49 (6), 831-842.
- 唐沢龍也. (2023). サービス・エコシステムに関するシステムティック・レビュー. 『経営・教養論集』, 3, 1-17.
- 金幸弘. (2020). サステナビリティ・マネジメント・コントロール・システム研究の現状と課題 文献レビューによる考察. 『関東学園大学経済学紀要』, 46, 17-30.
- 関智宏. (2021). 企業家活動プロセスをめぐる諸研究をマッピングする: 経営研究における影響力のある文献のシステムティック・レビュー. 『同志社商学』, 72 (5), 929-969.
- 関澤純. (2016). システムティック・レビューのあり方からレギュラトリーサイエンスの意味を考える. 『日本リスク研究学会誌』, 26 (1), 3-12.
- 田中麻紗子, & 市川伸一. (2011). オリジナリティのある文献レビューに向けて. 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 51, 203-215
- 中村信之 & 鈴木綾. (2019). 開発ミクロ実証経済学は実験系論文に寄せられる課題を解消しているか? 開発経済学ジャーナルのシステムティックレビューを基に. 『農業経済研究』, 91 (1), 1-16.
- 服部泰宏. (2022). 過去の展望から未来の問いをどのように導き出すか. In 『組織論レビューⅢ: 組織の中の個人と集団』 (pp.201-219). 白桃書房.
- 眞喜志まり. (2017). システムティック・レビューにおけるデータベース検索. 『情報の科学と技術』, 67 (9), 472-478.
- 牧野功樹. (2020). 中小企業の管理会計研究—システムティック・レビューによる統合の試み—. 『管理会計学: 日本管理会計学会誌: 経営管理のための総合雑誌』, 28 (1), 71-95.

